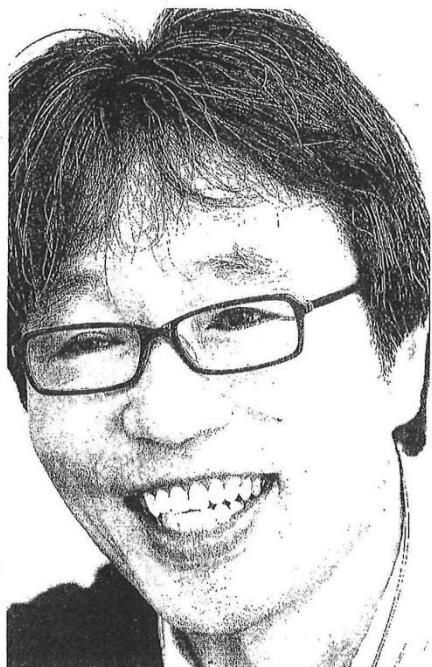


教育を考 える

遊びには、震災などで傷ついた子どもの心を癒やす力がある。多くの公園にある砂場。最高の遊具とまで言わながら、子どもの姿が見えなくなっている。砂遊びの力をどう生かし、子どものエネルギーにつなげるか。サンドアートの活動を通じている「砂遊びの伝道師」、同志社女子大教授の笠間浩幸さんに聞いた。

同志社女子大教授

笠間 浩幸さん



かさま・ひろゆき 同志社女子大教授。
幼稚教育学。世界各国を訪れ、砂場の歴史
や広がりを研究。サンドアートなど砂場模型
びワークシヨットを開いている。著書に
「(砂場)と子ども」など。58年 宮城県
生まれ。

の
だ

卷之三

成長に必要な力身につく

くこと固めた砂。左官用のココロでならしだだけで驚くほどきれいな平面になる。タケに切り取ること鋭い角ができる。とがつてねぶらべんは、じょんとぶつかつたらケガをしそうだ。

「コテを当てただけで砂はもう物だ。小さな子が、角にこわづわ指を出す気分は、やればあなたちきっと分かるだろう。

砂に水を含ませて押し固める。スフーンやベンナーライフなどで刻み込んだりしながら造形を楽しむサンドアートを始めてもうの年になる。やればやるほど、小さな子から大人までを夢中にさせる砂遊びの力を感じている。

ごみ用のボリバケツ。底をくりぬいてひっくり返し、砂と水を入れて、

砂遊びを生かそう

そもそも砂場は、子どもの発達を支える最高の遊具だ。

歩行もおぼつかない子どもが背の高さほどのか砂山に登る。自分の体を思い通りに動かすことへの挑

われて上から固めていく。ハケヅチ
外せば見事な円柱が、確かに表面に彫刻で
かり固めているから表面に彫刻で
できる。大きな砂山を直線的に
つて階段のあるヒラミッドだ。
場いっぽいの古代都市も簡単だ
目的は完成度を競うことでは
い。つくるアロセスを楽しむ
だ。つくりながら砂と対話し
行錯誤する。あしそうか、こ
しようか…。自分のイメージジ
話しているときの真剣な表情は
子どもも大人もとてもステキだ

具合を身につける。片手で器を手
えながらそこにシャベルで砂を入れ
れるまでになる。

砂場は汚い。多くの親がこう思
い込んで敬遠しているが、あまり
にもつたまらない。子どもには成長
する力がある。大人自身が魅力を
知り、その力を引き出してほしい。

戦は感動的だ

真っすぐ走れない。
転んだら顔
ではない。足を出し、
から落ちる…。

砂遊びには成長に必要な力が自然に育つ見事な仕掛けがある。遊びが子どもの成長エネルギーを引き出してくれるのだ。
今、子どもたちはどうなっているか。

2年半ごろから始まる因子作成。水と砂の配合や団子の丸め方、手と指先の感覚を通して調整し、どうしたらうまくいくか、試行錯誤する姿はあるで小さな科学者だ。「はい、どうぞ」とつくりた物に食べ物なりイメージを重ねる、とを繰り返して書きの力の土台ができる。トンネル振りなど共同作業を通して「コミュニケーション能力もあつて、イメージを形にする力もある」、実感できること。

「1歳未満の乳児が長時間、砂の上に座り続けている。…大量の砂は子どもの体をしっかり受け止め、子どもたちも自分の体を何の苦もなく一定の姿勢に保ち続ける」

子どもをそのまま受け止め、その力に応じた課題を与えてくれる。子どもの観察から出てきた笠間さんの言葉には、すごい説得力がある。

育つ環境がバーチャルになるほど、五感を育てる砂場の教育力は重みを増す。遊びもままならぬ震災の避難所でも、きれいな砂場で遊ぶことで、子供たちは心も身体も元気になります。

砂場があれば子どもには大いなる癒やしになるにちがいない。

2011年4月30日 週刊
京都新聞

(共同通信配信、他方紙に掲載)

同志社女子大教授・笠間浩幸さんに聞く



子どもは砂場遊びで成長する――。21日、京都市中京区の京都市男女共同参画センター（ワイングス京都）で開かれた相談トーク「よみうり子育て応援団@京都」（午後1時～3時半）では、専門家が様々な遊び方も紹介する。講師で、同志社女子大現代社

もっと遊ぼう 子も親も

砂場で自由な発想育む

引かれた。それを機に研究を進めるうち、成長するにつれ、砂場での遊び方が変化していくことに気が付いた。

地べたに座り、手で触る。スコップで何度もくつってバケツに入れる。山を作つてトンネルを掘り、次は水を流したり、車のおもちゃを走らせたりする。道具を使う楽しさを覚えるに従つて、子どもの遊び方はどんどん発展していった。笠間さんは「子どもが自由な発想で、自発的に遊ぶ力を身につけられるのが砂場の魅力」と言い切る。

笠間さんは1女2男の父。20年ほど前、当時3歳の長女と近所の公園の砂場で遊んだことが、研究者としての転機になつた。娘が熱中興味わく

会学部教授の笠間浩幸さん（幼児教育学）[写真]に、砂場の魅力を語つてもらつた。

から大正時代にかけ、185年に米・ボストンの街に砂場が設置された事例が伝えられ、「子どもが思い切り遊ぶことができる」と広まつた。近年は「衛生面で不安」という保護者の声に配慮し、設置しない公園も多い。

笠間さんは「子どもだけで遊べる環境が整えば、その分、親の負担を減らすことができる」と考え、各地で親子のための「砂遊びワークショップ」を開いている。

「子どもにとって、遊ぶことは生きること」と笠間さん。「遊びを通じ、子どもは生きる上で様々な力を育てる。その環境を整え、遊ぶ力を身につけられるのが大きい。その楽しさを伝えるのが大人の役割。一緒に考えていくべきでしょう」と呼び掛けている。

くらし ■ 家庭

子育て応援団

21日 @京都



「よみうり子育て応援団@京都」では、笠間さんや、キッズいわき・ぱふ代表の岩城敏之さん、布おもちゃ作家の大江委久子さん、女優

ます。

参加希望者は、遊びに関する悩みや相談を添え、住所、名前、年齢、職業、大人、子ども別の参加人数、電話番号を明記し、はがき（〒530-8551 読売新聞大阪本社「子育て応援団事務局」）かファックス（06-6881-7229）、Eメール（oendan@yomiuri.com）で。ヨミウリ・オンライン関西版（<http://osaka.yomiuri.co.jp/>）トップ